

# 地域と学校における協働活動の成果と課題

－地域とともに学び、成長するふるさと学習の実践事例を通して－

Results and Issues of Collaborative Activities between Local Community and School

Through a practical example of hometown learning aims learning growing with local community

今宿 綾子

Ayako IMASYUKU  
日野町教育委員会教育長

河原 恵

Satoshi KAWAHARA  
滋賀大学大学院教育研究科

<キーワード> 協働活動 協働的効力感 主体的・対話的で深い学び コミュニティ 地域の絆

## 1. はじめに

滋賀県の教育課題を分析すると、顕在化している教育課題としていじめの問題と学力の問題があげられる。特に、2011年に大津で起こったいじめによる自殺事件と2013年の全国学力学習状況調査の結果は、その後の滋賀県の教育に大きな影響を及ぼした。それ以外にも、日本全体で少子高齢化が進み、急速な技術革新やグローバル社会の到来によって人々の価値観が大きく変化してきた。虐待の増加や貧困問題など深刻な社会状況もある。一方、潜在的な教育課題としては、子供たちだけでなく教師のストレスやバーンアウトなど人間関係に起因する精神的な問題もある。それは教育の分野だけではなく、社会人全体を包む課題でもあると考えられる。

このような状況の原因はどこにあるのだろうか。またこれらの課題を解決するためにどのような取組をする必要があるのか。さらには、そのような取組によって教育は改善するのか。子供たちや教員組織を変容させ、人間性を伸ばしより良い人生を送ることにつながるのか。地域と協働することで地域の教育力が活性化しよりよい地域コミュニティを生み出すことにつながるのか。本稿では、これらの点を考察することで、教育の在り方とそれを基盤とした児童生徒の個の成長と集団の豊かさを実現する教育活動の在り方について考察する。<sup>(1)</sup>

## 2. 学校教育における協働活動の必要性

これまでの学校教育は、子供一人ひとりの個性や能力を育むことが重視されてきた。特に昭和に代表されるように国民の経済的水準を高めるための教育では、国民の生活目標が均質化され、個の学力を高め安定した生活を得るためによい企業や官公庁などに就職するかが目的であった。平成に入ると、経済的な成長は落ち着き成熟社会の到来とともに、人と比較して良い企業や官公庁に就職することに価値を見出すのではなく、自分に適した就職を求める者が増えてきた。自分の個性を発揮できる仕事をするということで、他者と同質の就職を求めるなどの横並びの発想よりも、自分の能力や才能で人生を切り

拓く人たちが出てきた。さらに平成の終わりから令和にかけては、科学技術の急激な進歩と、高度化した情報による経済社会の変化が顕著になっている。また、グローバル社会の到来により経済も文化も価値観も自らの力で考えるより、他者の考えによって人生や生活が影響を受けるようになってきた。特に、情報メディアが発信するものの見方や考え方が大人だけでなく子供にも影響を及ぼしている。

このような状況の中で、子供たちが身に付けなくてはならない資質・能力は何か。子供同士で意見交換や議論をし、協働することを通して、一緒になって考え問題を解決する経験を積むことだと考える。ここに学校教育における協働活動の必要性がある。

### (1) 子供の成長と協働活動

日本の学校は地域や学校の状況によって異なる場合があるが、ほとんどは30人から40人の学級集団を形成して学習する。淵上はこれを、「教師から見れば複数の子供に対する集団指導であり、子供から見れば教師や他の子供との関わりの中で学習活動を行う」(淵上 2005 ; p.76) と示す。その意義は、本来人間は社会的動物であり、協働して物事を成したり考えたりすることでさまざまなことを学ぶとともに、仲間と意見交換や議論をすることで高次の技術や思考を発見し獲得するものであるからだと考え。また、子供たちが他者とともに行動するとき、他者を競争相手とみるか協働する仲間とみるかで成長に差が生まれると考える。他者を尊敬し、互いの弱点や足りないところを補うことで高度な活動を創り出すことができるということである。また、それ以上に互いを信頼することで人間関係のストレスを軽減し、自らの成長だけでなく他者の成長を伸ばさせる効果があると考え。そのことは結果として、「社会への適応能力」(淵上 2005 ; p.78) を養うことにもなる。

従来の教育は個の伸長を重視したものであったが、近年は経済や科学技術が発たちし個の能力や才能・資質がクローズアップされるところもあるが、同時に協働やその協働を支える信頼と尊敬が重視されるようになった。

歴史的に見ると、政治や経済、スポーツや文化などあらゆる分野で名を残す者はその組織の頂点に立つものであるが、それは表面的であり、意図的に創られたものである可能性がある。実際には、頂点の人物を支える大多数の人間がいるからそれぞれ分野で成果が残るのであり、頂点の人物の才能や資質・能力によるものではない。そのように考えれば、教育の目的は知識や技能を伸ばさせるものでもあるがそれ以上に他者を信頼し尊敬して他者と協働して物事を成し遂げる資質や能力にあるように思える。このような点からも、これからの教育においては集団としての学校や学級の中で、さらには学校を取り巻く地域の中で協働できる力を育成することが重要であると考える。

## (2) 教職員の協働と教職員集団の成長

一方、教職員の協働についてはどのようにとらえればよいであろうか。また、教職員が集団として成長することの意義についてはどうか。次に、これらについて考察する。

まず、学校における教師集団の特徴についてである。淵上は教師集団の特徴について次のように示す。(淵上 2005 ; p.106) それによると、教師集団は、①職務上の緊密な結びつきは弱く、②教師個々人の自律性が保証されている。また、③学級経営や教科指導に関しては、教師の専門的能力に基づいた独自性が尊重されている。反面、④生徒指導場面においては、他教師と足並みを合わせようとする強固な同調性を持った集団であることが知られているとする。これらの分析がそのまま現在の教職員集団の実態を表わしていると言えないところもあるが、教職員集団の状況を検証する手がかりとなると考える。

ここで筆者が特に注意したい点は、次の2点である。1点目は、②において、教職員の「自律性が保証されている」という点である。2点目は、③において、学級経営や教科指導に関しては、「教師の専門的能力に基づいた独自性が尊重されている」という点である。②では、「自律性が保証されている」というが、実際に教員が自律的に取り組める場や権限が認められているとは思えない。また教員の自律性の内容を何によって検証しているかについても定かではない。つまりここでいう自律性は、単に自分のやり方で独自の考えに基づき教育活動をしているのであって、何のチェック機能も働かないもののように思える。自律性が保証されていて、なおかつ教員集団でその考え方ややり方が機能しているかどうか、またさらに良いものにする余地があるかを教職員同士がチェックし合うものになれば、教職員の自律性は有効に働くと考えるがどうか。また、③の「教師の専門的能力に基づいた独自性」についても同様に考える。その専門的能力はどの水準にあるのか。その能力を教員集団が協働的に研修をし、意見交換や議論をしてよりよいものにするのであればいいが、誰のチェックも受けることのない専門的能力は、真に子供の成長に寄与する教育活動になり得

るかという問題をはらんでいる。それを、単に「独自性」という言葉で分析するとすれば、それは独自性でもなく単に「独りよがりの考えややり方」であるとされる可能性もあると考える。このように考えると、教員の自律性や専門性を高めるため、またそれらが子供の教育に機能するためには、教職員集団の中で協働してよりよいものにする過程を常に持ち続けなくてはならないと考える。

一方、④の、生徒指導場面においては、他教師と足並みを合わせようとする強固な同調性を持った集団であるという点にも大きな問題をはらんでいるように思える。同調的な集団について、淵上は次のように分析する。まず同調的な教師集団の効用である。それらを次の3点でまとめている。それらは、①集団として意思統一が計りやすい。②生徒に対して明確な態度で臨むことができる。③教師自身があれこれ考えなくてすむ。(淵上 2005 ; p.108) とする。逆に、課題としては、①異論が挟みにくい、②創造的な活動が生まれにくい、(淵上 2005 ; p.109) とする。そして淵上は、結論として次のように述べる。すなわち、「集団における同調的圧力の強さは、多様な視点からの成員の異論を封じ込める働きを持ち、結果として集団で議論することのメリットを封殺し、均質的・同調的な考えは生まれるものの、創造的な営みは生じがたい」と言う。実際、本学の教職大学院における学生の議論を聞いていると、良い学校をつくるためのポイントとして、この同調的な集団の効用を言う意見にたびたび出会う。教職員みんなが同じ方向を向いて指導する学校が良い学校であるというのである。そこには、学校や学年の方針に同調せず、さりとて自分の意見を言うのでもなく、議論を避けて自分勝手な考えで指導する教員がいるからであると考えられる。前者は、集団の構成員が多様な考えや価値観を持っていることを認めないのである。そうでなくても、たとえ多様な考え方があることは認めていても、管理職や主任の考え、または会議で決めたことには従うべきであるという価値観や信念によるからである。結局、後者の意見を聞くことなく同調的な集団を目指す方が円滑に指導をすることができるというのである。しかし本当にそれでよいのか。そうではなく、前者も後者も他者を尊重し信頼して、目の前にある問題について、多様な考えを持つ教職員による集団の中で十分に意見交換し議論して、互いの考えを尊重しながらそれぞれのやり方で指導し、結果として児童生徒の成長につながればよいと考える。当然、教職員集団を構成する教職員だけが多様なのではない。集団で学ぶ子供たちもまた多様なのである。考え方や問題解決の仕方、さらにまた、人や物事に対する感情や価値観も当然ながら多様である。その多様性を認め、それぞれにあった指導をするためには教職員も協働的に活動し指導できるようにしなければならない。

この問題について淵上は、「教師の効力感」という視点からそれらの是非について研究し、整理している。それは次のように示される。「自己効力感とは、自分が取

組んでいる課題をうまく遂行できるという信念や確信のこと」と示し、自己効力感を持つことで内発的意欲を高め、自信をもって自己決定・活動ができるようになるという。学校教育の領域は大きく分ければ教科指導と学級経営である。教科指導は授業である。学級経営は児童生徒に学級活動を通して社会性や人間性を身に付ける活動である。これら授業や学級活動で教員が自己効力感を発揮できるかである。その際自己効力感に影響を及ぼすが、「協働的効力感」であるとする。自己効力感に対して協働的効力感については、「教職員との協働関係を構築し、望ましい人間関係を形成していくような対人的な効力感」と示す。(淵上 2005 ; p.113) さらに、教師の協働的効力感の構造を以下のように示す。①支え合いの自覚、②学校改善への意欲、③積極的援助、④普段のコミュニケーション、⑤立場の違いの克服、⑥管理職との協働である。ここで、教職員の効力感について、教科指導や学級経営において個人的効力感と協働的効力感の違いについて考察してみる。

この点についても淵上は興味深い指摘をしている。淵上は、「教師の効力感が職場の雰囲気によって、どのような影響を受けるか」について、協働的な職場風土を持つ学校と同調的な職場風土を持つ学校での教師の効力感の違いを調べることによって明らかにした。(『同』p116) その結果、教師の個人的効力感、協働的な職場風土を持つ学校の方が同調的な職場風土を持つ学校より少しは高いもののあまり変わらないが、教師の協働的効力感の方は前者の方が後者よりはるかに高い効力感を示していたという。(淵上 2005 ; p.116) 結論として、「教師一人ひとりの力量を反映している個人的効力感、職場の雰囲気によってほとんど左右されないが、協働的効力感、協働的な職場の雰囲気の中で培われていく部分が多い」と述べている。(淵上 2005 ; p.116) これらの構造は、教師間の関係に影響するだけでなく子供同士の関係や教師と子供との関係にも影響すると考える。子供たちにとっても教室が協働的な雰囲気を持っているかどうかで学習活動や学級活動に対し、自己効力感を持って取組めると考える。

### (3) 子供の集団と学校生活の意味

子供が学校を、「楽しい」「満足している」と感じることは学校の存在意義を示すものである。(淵上 2005 ; p.171) 子供がこのように感じるのに対して影響を与えるものは「友人関係の善し悪し」である(古市 1994 ; p.169) という。さらに、学校生活を楽しみと捉えている生徒は、集団の決まりやルールなど社会的規範を尊重し、物事に対して積極的に関与する傾向が強いという。(淵上 2005 ; p.172) 古市の研究結果を受け、淵上は、「子供が学校生活を楽しみと感じる意識が、学校生活における社会性や人間関係形成など、成長や発達に関わる重要な側面を育成する」(淵上 2005 ; p.172) という。ここで、これまでの議論を振り返ってこの問題を考察する。まず「集団の決まりやルールなど社会的規範を尊重し」とい

う問題である。他者を信頼し、尊重することと、集団の決まりやルールなど社会規範を尊重することの因果関係についてである。前者によって後者で示す行動がとれるようになることはあるが、後者で示す行動をすることで、前者すなわち他者を信頼し、尊重することができるようになるかは定められないと考える。後者が優先され、それがなければ教育ではないという固定した考えが、先に述べた同調的は学校風土につながるおそれはある。社会性を育てるということは、単に社会規範を尊重するのではなく、学校や学級を構成する子供の多様性を認め、意見や考えが違って信頼し、尊重するとともに子供たち同士で意見交換し議論することで、一緒になって互いが楽しいと思える学校をつくることである。そこには、自己主張だけでなく他者の考えや意見を尊重し、集団としてよりよい在り方を模索するという学びを行うことが重要であると考えられる。そのことが、子供たちに学校生活における社会性や人間関係形成などを育成することにつながり、それが、子供たちを成長させ発達させる。さらには、その活動を通して、他者も自分も学校や学級内で存在感や安心感を得ることになり、子供が学校生活を楽しみと感じる意識が醸成されると考える。学校や学級での学習活動や学級活動等を協働的な雰囲気の中で育てることが、学校教育における第一義的な目的であり、そのことによって個々の資質や能力も育つのである。この因果関係を正しく認識するかどうかで教育の質がまったく違うものになるという意識を教職員も児童生徒もともに持つことが重要である。

### (4) 新しい教育を創造する理念と協働活動

今回の学習指導要領(平成 29 年告示)の改訂では、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すとする。また、その理念を「主体的・対話的で深い学び」の実現と各学校における「カリキュラム・マネジメント」の推進と言う二つの概念で表現する。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進については、子供たちが主体的・自律的に、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、生涯にわたって能動的に学び続けることができる基礎を養うとしている。そのためには、意見交換や議論を通して対話的に学ぶことと、その過程や振り返りの中で、「見方・考え方」を働かせることが重要になるとする。このように、主体的・対話的で深い学びにつなげるためには、子供たちの自主性を重んじ、子供同士で意見交換や議論をする場を保証し、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という「見方・考え方」を育てることである。もちろん授業の中では、生徒が考える場面と教師が教える場面があるが、生徒たちが自分たちで考え、意見交換し、学習や人生の見方・考え方を自在に働かせる経験を積むことは、教育として本



質的な意義を持つものとする。

次に、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進について論じる。カリキュラム・マネジメントの概念では、子供たちの協働的な学習を進め、現代的な諸課題に対応し教科等横断的な学習を充実するが大切であるとする。また、ここでも「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が必要であるという。これらの取組の実現のためには、学校全体として、児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握することが重要であり、このような教育課程に基づき地域とともに目標を共有し、組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図ること、すなわち「カリキュラム・マネジメント」の推進に努めるというのである。(文部科学省 2017；解説編 p.2-5 より要約)

このように、学校と社会が共有し、連携・協働すること、主体的・対話的で深い学びを実現すること、カリキュラム・マネジメントの推進を図ることは、いずれも子供たちの学習や教育活動を協働的な仕組みや雰囲気の中で実施するものであると考える。そのことを通して、子供たちの協働的効力感を引き出し、将来社会人として他者を信頼し尊重することで豊かな人生と人間関係を形成し、社会性と人間性を磨く人になって欲しいということであろう。これは教育基本法の第 1 条(教育の目的)の、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」(文部科学省 2017；p.2) という理念と符合するものであると考える。

### 3. 地域全体で子供の夢と志を育む教育 一心と心が通い合うふるさと絆学習一

滋賀県の南東部に位置する日野町は、人口は約 21,000 人、5 小学校 1 中学校を有している。第 3 期日野町教育振興基本計画では確かな学力、豊かな人間性、心身の健康作りを進めるとともに、少子高齢社会を迎える中、自己と社会のつながりを実感し、地域の実情に応じた活力ある教育・コミュニティの推進を目指している。また町には「地域の子供は地域で守る」という考えのもと、下校時の街頭補導などを通して子供たちに声をかけ、愛情を持って関わる人も大勢いる。防犯意識・安全意識の高い、地道で息の長いこれらの取組は、日野町の教育や子供の成長に大きく貢献している。

このような小規模自治体において、地域学習を進め、地域のゲストティーチャーと触れ合うことを通して、子供たちに地域理解とともに、誇りや愛着を育て、将来にわたり地方創生の意識を育てていけるのではないかと考える。同時に地域のゲストティーチャーにとっても、自身の経験や知識を生かし、町の宝・国の宝といえる子供たちと触れ合うことにより「生きがい・やりがい」を感じ、活力ある地域社会の創生につながるかと考える。このようなことから、日野町における地域学習である「ふる

さと絆学習」について整理し、これからの教育の目指す方向と、地域における協働活動の課題と成果について考察する。

#### (1) 地域とともに学び、成長するふるさと学習

日野町は戦国武将蒲生氏郷公の生誕地、近江商人を輩出した地域であり、自然・歴史・伝統文化が豊かである。このことを生かし、地域の人材を活用した教育を推進している。日野町の合言葉は「ふるさとを愛し、ふるさとに誇りを持つ教育」である。さらに「町全体で地域の将来を担う子供たちを育成する」という方針を示し、学校、家庭および地域住民それぞれが役割と責任を自覚し、子供たちを健やかに育む体制づくりを目指している。

家庭科、生活科、総合的な学習の時間などでは、保護者や地域の人に積極的に関わっていただき、校舎周辺の環境整備など、多岐にわたって積極的な学習支援・学校支援活動を進めている。特に家庭科の実習では、玉止め、玉結び、ミシンの操作などが不慣れな子供たちに対して、お年寄りの知恵を発揮してもらいながらそれらの指導に携わってもらっている。また地域の祭りを盛り上げるお囃子を口承で引き継ぐなど、伝統を守っているという意識を持って子供たちを育てている。このほかにも、地域の人とともに作った学林の中の「森のレストラン」の完成を祝って、子供たちがお世話になった人たちとテーブルを囲んで話をはずませ、絆を深める取組も行い、このようなひとは、子供にとっても地域の人にとっても楽しい時間となっている。

今日、どの地方においても少子高齢化が進み、またグローバル化社会の到来や急速な技術革新など、社会の変化は著しい。そのような中で、子供たちの生活や教育をめぐる状況、家族のあり方をも急激に変化している。教育に関しても制度面・内容面において改善・改革が急速に進んでいる。また一方で「地域の絆」を強め、地域の実情に応じた教育の中で、活力あるコミュニティを形成し、維持していくことも大切な観点になっている。このように地域の子供が少なくなりつつある現状であるが、まず「学校に関心を持っていただく」、「学校に足を運んでいただく」と毎年秋には「地域ふれあいデー」を設けた。事業を重ねるたびに、町の学校をいくつも回ってくださる人が増え、おばあちゃんとお父さんと幼稚園児という珍しい組み合わせの参観者も目にするようになった。このような取組を通して、学校に関心をもと、学校に足を運んでくれる人たちが少しずつ増え、地域の人たちの中に「地域参観日」が定着してきていることを感じる。このことは、自分の町の歴史や文化を学ぶ「ふるさと学習」を、地域の人たちとの関わりを大切に「ふるさと絆学習」につなげていくことにもなっている。「ふるさと絆学習」におけるさまざまな体験は子供たちのコミュニケーション力を養い、学びの質を高めることにもなっている。また地域の人にとっては、専門性を発揮する充実感や伝える喜びを持つこととなり、子供も学校も地域も共に活性化するという、まさに「三方よし」

の取組となった。

これらの温かな関わりを通して、子供たちが地域の行事に積極的に参加するようになり、町民運動会などでは中学生の活躍が見られるようになった。思春期真っただ中の中学生は、年齢的にも地域との関わりが途切れがちな年代である。その中学生が町の行事に参加する姿を見て、改めて日頃からの関わりや、若者の力を信じて活躍の場や役割を与えることで一緒に活動することの素晴らしさを感じているところである。

日野町では、地域の人たちを巻き込んでの「あいさつ運動」に取り組んでいる学校もある。その輪がどんどん広がり、保護者だけでなく地域の人たちをまきこんで、年末には「あいさつ運動+ふれあい大掃除」が展開された。地域の人たちとあいさつし一緒になって大掃除をする取組を通し、普段、校内では見られないような子供たちの頑張りが見られたという。生活の中から課題をしっかり見つめる目と行動力が、地域の連携を得て、大きなうねりとなっていき、子供たちの成長を後押ししていると考える。

「町のたから」「国のたから」という表現をよく目にする。この「町のたから」は自然、文化、歴史、人であり、日野町では町全体が丸ごと「たから」である。この「たから」を生かすには、自覚的に「たから」を捉える力が必要である。夢と志を持ち、可能性に挑戦し、自分のもっている力を最大限に発揮できるよう、町全体で子供たちを育てていく取組が今後は一層必要であると考え。

## (2) 活動例の紹介

日野町では、学校、家庭および地域住民みんなが役割と責任を自覚し、子供たちを健やかに育む体制づくりを確立する「地域を誇りに持ち、地域が大好きな子供の育成」を目指して地域と学校が連携・協働して学校教育を支援する活動が徐々に定着してきた。

学期ごとに定期的な実践交流会を実施し、地域コーディネーターと各校の取組についての情報交流を行ってきた。子供たちや保護者の反応がよく効果が大きかった事業については、スタッフやボランティアの招集も多く、活動も活性化している。コーディネーターが作成した「活動便り」や「アンケート」などの活用方法など、話し合いを重ねるたびに新しいアイデアや取り組んでみようとする意欲が伝わってくる。校長会や教頭会などさまざまな会議や研修会における各校の取組状況の交流も「特色ある学校づくり」に大変効果があった。

### 《 活動例 A 小学校 》

地域と学校が協働した活動

① 3年生社会科および総合的な学習の時間における学習では、地域学習として日野町の伝統ある祭り「日野祭り」について学んだ。綿向神社の宮司さんや日野祭りの曳山保存会の方から曳山や日野祭囃子のお話を聞き、充実した学習を行うことができた。

また、日野の伝統野菜である日野菜について地域の人たちのご協力を得て学習を進めてきた。日野菜を栽培す

るだけでなく、その歴史や流通、料理について詳しく調べた。そして、グループごとに調べたことを地域の人に発表し、学習のまとめとした。

② 3・4・5・6年生の総合的な学習の時間における福祉学習

福祉学習については、4年間を見通し、系統立てた学習を行っている。3年生では、視覚障害のある人から話を聞いた。実際に間近で盲導犬を見せていただくことができ、児童の心に残る貴重な学習の機会となった。また、4年生では、地域にある福祉施設の施設長さんにお越しいただき、障害者理解についての話をいただいた。さらに、5年生では、障害のある方から直接お話を聞いたり、車いす体験をしたりして、学習を深めた。6年生では、これまでの学習を踏まえ、実際に地域の福祉施設へ行き、そこで働いている人の様子を見せていただいたり、話を聞いたりして学習を深めた。

③ クラブ活動（お囃子クラブ・かるたクラブ）への地域指導者の招聘

日野町の伝統ある祭り「日野祭り」の際に演奏する「お囃子」をやりたいという児童の強い思いから「お囃子クラブ」が発足した。その指導のために、地域の人々の協力を得た。子供たちは、地域の演奏会に大人の人に交じって出演している。また、かるたクラブにおいても、地域の人に指導をいただき、大変活発な活動となっている。

### 《 活動例 B 小学校 》

① 3年生総合的な学習の時間では地域の産業であるお茶について、茶摘み～お茶の入れ方までを地域の人々の協力のもとで行っている。茶摘み体験では、保護者や地域の人にも参加してもらい、児童の体験学習の様子を見ていただいた。摘んだお茶の葉は地域の人が天ぷらにして児童に届けてくださり、お茶の葉の料理を味わう事が出来た。

② 環境整備

小規模校のため、草刈りやグラウンドの環境整備に人手が足りないことがある。児童が行っている除草作業に地域の人たちが参加し、児童と一緒に除草していただいた。

### 《 活動例 C 小学校 》

① 見守りあいさつ運動

朝の登校時間帯に、「小学校見守り応援隊」やPTAの有志の人たちが交代で校門付近に立ち、見守りあいさつ運動に取り組んだ。はじめは恥ずかしそうにしていた子供や黙って通り過ぎる子供が多かったが、徐々に慣れ、自分から進んであいさつや声がけができる子供が増えてきた。この変化は有志の人たちにとっても大きな喜びになった。

② 体験的な学習への支援

実習などの指導や支援を経験豊かな人をお願いし、きめ細かな支援を必要とする学習でアドバイスや手助けなどの支援をしていただいた。

家庭科の裁縫・ミシン縫い、焼き芋、3学期の伝統的な暮らしや遊び、そろばん等

### ③ふるさと学習支援

特産品や伝統行事など、ふるさとをテーマにした総合的な学習で、地域の人に指導をお願いした。(日野菜学習、ホイノポリ製作等)

### ④学校生活を豊かにする活動

昼休みコンサート(歌やおカリナ)を開催した。保護者や地域の人を招待した。

### ⑤校内音楽会における伴奏や学習支援

## 《 活動例 D 中学校 》

### ①家庭科実技支援

被服学習における「ブックカバー」の制作で、「手縫い」「ミシン縫い」等個別対応が非常に重要な場面で、多くの人たちの支援を受け、個々の生徒に技能を定着することができた。また、生徒たちも遠慮なく質問ができた。

調理実習では、包丁を使う際の安全確保ができた。

### ②敷地内環境整備作業

約 100m 近くの花壇の手入れや周囲に植わっている木々の剪定をしていただいた。

中庭ウッドデッキの老朽化が進んでいたため、地域の塗料会社に協力をいただき、塗り直すことができた。

校庭のサツキが多くの部分で枯れていたため、地域のボランティア団体に指導をしてもらいながら、生徒も一緒に植えて直しを行った。

### ③読書活動推進事業

毎週火曜日に、各学年 1 クラスずつ、地域の読み聞かせグループの協力を得ながら、読み聞かせ活動を実施した。

1 年生「外国語の本や言葉に触れよう」2 年生「ブックトーク」3 年生「帯バトル」と銘打って、各学年、全クラスを対象に図書館司書等の協力を得ながら、読書活動推進の授業を行った。

### ④家庭科・保育実習での校舎外移動に関する交通立番・見守り

3 年生・家庭科の保育実習で 1 キロメートル先の「あおぞら園」まで自転車での往復路の安全を支援していただいた。

## (3) 事業の成果と課題

体験学習や環境整備などでは、できるだけ多くの地域の人たちに協力を依頼して子供たちとふれあう機会を増やしたことで、学校に関心をもってくれる地域の人が増えたように感じた。地域ボランティアの人からは、「子供が喜んでくれると、元気をもらえる」「この学校の子供たちの成長に関われることがうれしい」などの感想をいただき、あたたかく支えてもらっていることがわかる。

全体的に、音楽会やふれあい学習会などに訪れる地域の人が増えている。いろいろな活動を繰り返し続けてきたことで、取組に広がりや深まりが出てきた。また、複数回参加いただいた人から、支援の工夫などの声を聞くようになり、よりよい活動へと改善、発展させていくことができた。また参加された人が他の人へ参加を呼びかけるなど「人が人をよぶ広がり」が出てきた。

また、気軽に学校へ足を運んでくださる雰囲気や参加の広がりが出てきた。参加者の中からは、「今年もこんなことをしたい」、「今年は、こんなことをしたらどうか」といった願いや思いを伝える人が出てきた。児童と地域の人とのふれあいの機会が増え、お互いに顔なじみとなり、地域の中で出会ったときにも気軽に声をかけてもらうことが増えてきた。

毎年 11 月に実施している「学校開放日・地域ふれあい DAY」では、授業参観だけでなく地域のいろいろな技術を持った人たちに学校に来ていただき、1, 2 年生には昔遊び体験を、3 年生以上には、様々な技術を「弟子入りしよう」という形で伝承する体験活動を行った。地域の人と直接触れあう良い機会になったことと、子供たちが「すごい方がたくさんいらっしゃる!」と言うように、自分たちの地域に誇りが持てる活動となった。

学林の「森のレストラン」ではさつまいも植えや田植え・稲刈りなどの栽培活動の支援に来てもらったり、中庭や裏山を整備していただいたりした人々を招待して、昼食を共にした。招待状を出すのは、中学年、調理するさつまいもを洗うのは低学年、かまどベンチで収穫物を使って調理するのが高学年というように役割分担し、全校体制で、感謝の気持ちを届けた。昼食を共にすることで、日頃のお礼の思いも伝わり、地域の人たちにより親しみを感じられる時間となった。

またある小学校では、通学路の危険箇所の確認をする際、PTA 役員などの保護者の他に自治会長、民生委員にも加わっていただき、安全点検を実施できた。学校からの「子供たちに注意喚起のための看板を設置したい」という要望の提案を汲んでいただき、自治会長から地域の人に依頼してくださるなど、スムーズに安心・安全な学校の環境づくりを進めることができた。

さらに中学校では、生徒の読書離れという実態から読書活動に重点をおいた取組を計画した。町内 4 つの「お話ボランティア」による「読み語り」の時間を朝に設定し、15 分間、生徒が非常に静かに、落ち着いて、お話を聞き入る様子が見られた。

地域の日野菜工場の見学、日野菜を扱ったレシピ作り、日野菜の歴史についての調査など、様々な地域学習は教科と関連づけた学習として行っている。さらに、栽培した日野菜の種を地域の人に広く販売することも行っている。これらの学習を通して地域の人々に関わり、地域への関心を深め地域への愛着がもてるようになれば考える。今後は、地域の人による学習支援の輪が広がるような協働活動をもっと進められるようにしていきたい。

また、今年度で 6 回を迎えた「夏休みチャレンジ教室」という事業がある。これは夏季休業中、全小学校から希望者を町立図書館に集め、自分のやりたい課題を見つけ、チャレンジするという自学自習のチャンスである。指導や支援をしてくださるのは退職教員のみなさん。退職教員は、一人ひとりじっくりと向き合い、個に応じた指導をしたいとの思いを持っていてくださる。保護者や子供



たちからも来年も是非参加したいという声が聞かれ、ニーズは年々増えている。

また、学校の補充学習には学習支援スタッフを振り分けて、勉強がわかる楽しさを実感させたいと考えている。また隣接する公民館との連携を密にすることにより、地域の人材の掘り起こしに努めてきた。さらに地域からの支援者の掘り起こしをしていきたい。

課題としては、学校に関心を持つ人は増えているとはいえ、同じ顔ぶれが多い。自分の持っている力を気楽に発揮していただけるよう呼びかけていきたい。昼休みを利用してミニコンサートを実施している学校がある。児童も地域の人も自由に楽しめるコンサートなので、音楽を楽しみたいという町民が多く訪れる。こうしたみんなが集まりやすいコンサートなどがひとつのきっかけとなり、自然な流れで地域に開かれた学校になることを期待する。

年間計画を立てる段階での見直しと、実施後の振り返りは必要である。例年行っている活動が多いが、改善を加えることが大切であり、学校も、支援に来てくださる人も、双方の考えを聞くことがこの事業では大事である。地域コーディネーターが年度末に、学校、地域に向けてアンケート調査を行っているののでしっかり振り返りたい。

さらに令和2年度は新型コロナウイルス感染症対応で多くの事業や行事が、中止・縮小・延期となっている。このことは、例年の活動を漫然と続けるのではなく、この事業のねらいはなにか、どんな力をつけたいのか、真に必要な事業かを精査する機会にもなった。「ねうち」を再確認した中で、いっそう活性化した取組としていきたい。

#### (4) 取組への評価

筆者は日野小学校校長時代、平成23年度に、博報堂博報賞の地域活性化部門で大賞を受賞した。「地域のお年寄りには地域で守ろう！」を合い言葉に、福祉協力委員、民生委員とともに、一人暮らしのお年寄りを訪問し、安否確認をしたり、おしゃべりをしたり、プレゼントを渡したりして交流を持つことで、お年寄りに元気に暮らしていただくというねらいを持つ活動である。10年も続く学校と地域の人々の協働活動に、校長として赴任してとても感動した。しかし、当の実施者はただ淡々と役割や分担を果たしているだけであった。そのような中、博報賞を受賞したことは、大きな自信と誇りとなった。町や学校の中の宝物のような活動に光を与え、評価することは喜びと意欲につながると実感した。

今年度は管内の学校が学校応援ボランティアと子供たちによる「豊かな学校環境づくり」の充実した体験活動が評価され、博報賞を受賞した。教育活動の中に位置付け、教科とも関連させた活動が評価された。こうした受賞を励みに、活動を発展させていきたい。

#### 4. おわりに

新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」がキーワードとなっている。「自ら課題をもち、自分の力を最大限に伸ばし、未来を切り開いていく」という学びの姿はすでにこれまでも大切にされていた。そしてその根本は相手への思いやり、尊敬、礼儀作法、心身の鍛錬であり、これらは日本の教育の誇れる特徴だと改めて思う。人々は各地域の生活の場で、日々の暮らしを大切につないできた。

近年は少子化により異年齢での活動が少なくなった。文化や伝統の担い手も少なくなり、継承が危ういものもある。さまざまな価値観や急速な社会の変化により、学校や家庭を取り巻く環境は急速に変化している。それだからこそ、同じ地域に住む人たちが個も全体も大切にしながら、自発性や協調性、考える力を身につけ、強い心を育てるという教育はかけがえのないものである。

まずは人材発掘、より良い大人との交流で子供たちはいつもとは違う表情で力を最大限発揮することができる。また高校生や中学生に活躍の場を持たせたい。

町ではこの秋、地域の高等学校と教育文化・まちづくりに関する連携協定書をかわした。地域社会における児童生徒の健やかな成長と人材育成、高等学校の魅力度のなご一層の向上等の重要性に鑑み、双方の持つ資源を活用し協働・協力し持続的に総合的な発展に資することを目的とするものであり、しっかり取組みたい。

また小さな取組ではあるが、今年も「あいさつ運動、親子読書」に取組む。これらは学校や家庭だけではなく地域の人たちと共に進めていくことによって、力強いものになっている。「おはよう、ありがとう、すみません」という心のこもった言葉が飛び交う支えあいの町、家庭での読書習慣で得た広い知識や豊かな心、考える力を通して未来の創り手となる子供たちを育てるという目標を、皆で共有していきたい。これからも地域に連綿と続いているよき伝統を守りつつ、ふるさとの絆を学校や地域活性化の切り口としながら、これからの教育に対応し、地域課題を解決できる教育推進に努力したい。

以上のような実践を踏まえて研究を進める中で、学校教育においては、学校の内と外を問わず協働的な活動を推進することが、子供の成長に有効であることが明らかになった。すなわち学校の中では学習活動や学級活動などを子供同士、また子供と教員が協働的に実践することで、子供の心を育て内発的な意識づけや動機づけを引き出すことができると言える。また学校外でも、地域の人たちとの交流を通して、地域の人とのふれあいや、伝承経験、さらには地域の人を尊重する態度が養われ、将来、子供たちが地域を支える人として育ってくれる可能性を感じる教育活動となったと考える。今後も、児童生徒や教職員が、学校の中でも、また地域の中でも生き生きと活動できる場を整え、地域とともに教育目標を共有し、教育活動の質の向上を図りたい。

**注**

- (1) 本稿は、執筆者である河原と今宿が協働して全体構想を協議したのちに、1・4を二人で執筆し、それらを持ち寄り調整した。また、2は河原が、3は今宿が執筆し、これらを再度調整し最終原稿とした。

**引用・参考文献**

- 淵上克義 (2005) 『学校組織の心理学』日本文化科学社  
古市裕一 (1994) 『学校生活の楽しさとその規定因』日本教育心理学会第36回総会発表論文集  
文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 総則編』  
文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示)』